

国際経済

岩村 英之

参考文献

以下は全 4 回を通じての参考文献である。いずれも、十分なページ数を割いて貿易理論を丁寧に説明している。より厳密な議論を望む場合には、これらにあたってみるとよい。ただし、本講義に比較して数学的表現（といっても高校 2 年程度）が多用されている。

伊藤元重・大山道広『国際貿易』（モダン・エコノミクス 14）岩波書店，1985 年。

竹森俊平『国際経済学』（プログレッシブ経済学シリーズ）東洋経済新報社，1995 年。

野口旭・高増明『国際経済学』ナカニシヤ出版，1997 年。

1 貿易の利益 1—交換による選択肢の拡大

貿易から得る最も基本的な利益は、消費の可能性が拡大することである。貿易を行わないとき、その国は自国で生産したものをそのまま消費する（＝食べる、使う）しかない。たとえば、今、世界で 2 種類の財—米とテレビ—しか生産されていないとしよう。ある国が、テレビ 300 台と米 50 単位を生産したとする。また、世界各国はテレビを 1 台 10 万円で、米を 1 単位 10 万円で取引しているとする。つまり、この国が貿易を開始するならば、テレビを輸出して 1 台あたり 10 万円の収入を得ることもできるし、反対にテレビを 1 台 10 万円で輸入できることになる。

さて、この国が貿易を行わないとすると、自国で生産したものをそのまま消費するしかないので、図 1 の A 点で表される生産点（点）が、そのままこの国が消費する組み合わせとなる。一方、この国が貿易を開始すると、つくったものの一部を輸出して得た代金で、つくっていないものを輸入することが可能となる。したがって、生産した組み合わせとは異なる組み合わせを消費することが可能となるのである。

たとえば、300 台のテレビのうち 100 台を輸出すると、1000 万円の収入が得られる。これによって米を 100 単位輸入することができるので、テレビ 200 台（生産 300 台 - 輸出 100 台）+ 米 150 単位（生産 50 単位 + 輸入 100 単位）という B 点の組み合わせを消費することが可能となる。さらにもう 100 台のテレビを輸出するならば、その代金でさらに 100 単位の米を輸入できるので、テレビ 100 台 + 米 250 単位という C 点の組み合わせが消費可能となる。もちろん、反対につくった 50 単位の米を全て輸出すれば、50 台のテレビを輸入することができるので、米はいっさい食べずにテレビのみを 350 台消費するという極端な選択も可能である（実際にそれを選ぶかどうかはともかくとして）。

以上のように、貿易を行うことによって、この国は直線上のいずれの組み合わせも消費することが可能となる。貿易をしない場合には、生産点である A 点をそのまま消費するしか選択肢はないのだから、貿易は消費の選択肢を飛躍的に増大させるのである。消費の選択肢が拡大すること、消費が生産に縛られなくなることが、貿易による第 1 の利益である。

2 貿易の利益 2—分業による生産の効率化

前節で、貿易によって消費が生産に縛られなくなることを見たが、これは同時に、生産が消費に縛られなくなることをも意味する。すなわち、貿易によって自国でつくりだせない財であっても他国から輸入することが可能となるならば、全ての財を自国でつくる必然性がなくなる。すると、自国は「苦手な」財の生産を完全に停止し、その分の労働力を「得意な」財の生産に集中させることが可能となる。こ

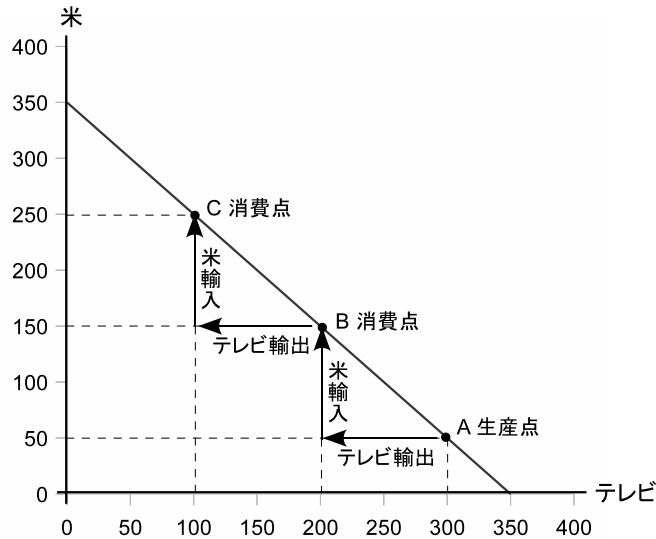


図 1: 貿易による消費の選択肢の拡大

うして全ての国がそれぞれ得意な財の生産に集中するならば、世界全体の生産効率が改善する、すなわち、今までと同じ技術水準および労働者の数で、世界全体としてはより多くの財が生産できるようになるのではないだろうか。生産できる財の量が増えることは、世界の人々が消費できる（＝食べたり使ったりできる）財の量も増えることを意味する。こうして、貿易に参加する国が貿易から得る第 2 の利益が生ずるのである。以下、貿易の第 2 の利益がどのようにして生ずるのかを少々細かく見ていこう。

2.1 リカードの世界（リカード・モデル）

貿易の効果を考察するため、19 世紀イギリスの経済学者リカード（David Ricardo）は、次のような非常にシンプルな世界を想定した。リカード・モデルと呼ばれるものである。

設定 1 世界には 2 つの国（自国と外国）しか存在しない。

設定 2 この世界では、2 つの財（米とテレビ）のみが生産・消費される。

設定 3 いずれの財も、労働力のみを用いて生産される。

設定 4 財は自由に国境を越えられるが、労働者は国境を超えることはできない（＝国外で働くことはできない）。

設定 5 自国には 800 人の労働者が、外国には 2000 人の労働者が存在している。

設定 6 自国と外国の技術レベルは表 1 のようになっている。表の数字は、米 1 単位（100kg）・テレビ 1 台をつくるのに必要な労働者数を表している。ところで、ある財 1 単位の生産に必要な労働者数が多いということは、労働者ひとりあたりの「はたらき」が小さいことを意味している。反対に、ある財 1 単位の生産に必要な労働者数が少ないということは、労働者ひとりあたりの「はたらき」が大きいことを意味している。その意味で、この表は各産業における労働者ののはたらきの高さ、すなわち労働生産性（labor productivity）を表しているとも考えることもできる。

さて、このようなシンプルな世界において、貿易はどのような意味を持つのであろうか。まずは、貿易を行わない状態から考えよう。各国は自国で消費する財を全て自国で生産しなければならない。

	自国	外国
米	4人	5人
テレビ	2人	10人

表 1: 単位生産あたり必要労働者数

したがって、両国ともに両財を国内で生産することになる。ここでは、さしあたり両国ともに半分の労働者を米の生産に、残りの半分の労働者をテレビの生産にまわすとしよう。表 1 および両国の労働者数（自国 800、外国 2000）からわかるように、両国における両財の生産量（＝消費量）は表 2 のようになる。

	自国	外国	世界全体
米	100 単位	200 単位	300 単位
テレビ	200 台	100 台	300 台

表 2: 貿易前の生産＝消費

貿易を行わないならば、これがこのまま両国の消費メニューとなる。すなわち、自国は米を 100 単位、テレビを 200 台消費し、外国は米を 200 単位、テレビを 100 台消費することになる。しかし、ここで両国が貿易を開始すれば、それぞれが両財を生産するのではなく、各自得意とする財の生産に力を入れ、苦手なほうは相手から輸入するという方法も可能となる。問題は、そうすることで本当に両国は「よりよく」なるのか、ということである。その前に、そもそもどちらの国がどちらの財を「得意」としているのだろうか。

2.2 分業による生産の効率化

「ある財の生産が得意である」とは、その財を他国よりも安価につくることができるということであろう。では、「安価につくれる」とはどういうことであろうか。表 1 から、自国が外国より少ない労働者数で米を生産できることがわかる。しかし、同様にテレビに関して、やはり自国のほうがより少ない労働者数で生産できるようになっている。となると、自国は米もテレビも得意、したがってどちらも自国で生産したほうがよい（＝貿易しないほうがよい）という結論になるのであろうか。そうではない。「何人の労働者が必要か」という基準だけでは、自国と外国の得意・不得意を決めることはできないのである。

確かに、自国は外国より少ない人員で米をつくることができる。しかし、労働者が国境を越えられない以上、米をつくるためにはその分の労働をテレビ生産から連れて来なければならない。たとえば、自国が米の生産を 1 単位増やすとしよう。そのためには、新たに 4 人の労働者を水田に連れてこなければならないが、この 4 人はどこから調達すればよいだろうか。外国から労働者を雇用することができない以上、自国のテレビ工場から連れてくるしかない。ところで、4 人の労働者を連れていかれたテレビ工場では、テレビの生産が 2 台減少することになる。すなわち、自国では米を 1 単位つくるのにテレビを 2 台犠牲にしなければならないのである¹。このように、労働者が国境を越えられない以上、米の増産はテレビの減産を伴うという点に留意する必要がある。

一方、外国のほうは、米を 1 単位増やすためにテレビ工場から 5 人の労働者を連れてこなければならないが、これによってテレビの生産は 0.5 台減少することになる。すなわち、外国のほうは、米を 1 単位つくるのにテレビを 0.5 台だけ犠牲にすればよいのである。このように、「米を 1 単位生産するのに犠牲になるテレビの台数」を比較すると、自国の 2 台に対して外国は 0.5 台と、外国のほうが少ない。

このように、自国がテレビ 2 台を犠牲にして米をつくっているのに対して、外国が 0.5 台の犠牲でつくるのであれば、次のような操作が考えられる。すなわち、犠牲の多い自国が米の生産を 1 単位

¹このあたりの計算は、表 1 を見ながら自分で必ず確認すること

やめて、代わりに、少ない犠牲で済む外国がその分の米をつくるのである。この操作によって、米およびテレビの生産量はどうなるだろうか。

ステップ1 自国が米の生産を1単位減らす。水田で労働者が4人余るので、テレビ工場に移動する。テレビの生産が2台増加する。

ステップ2 自国の代わりに外国が米の生産を1単位増やす。テレビ工場から水田に5人の労働者が移動する。テレビの生産が0.5台減少する。

以上のように、自国が犠牲にしていたテレビ2台が復活し、代わりに外国が0.5台犠牲にすることになるので、両国合わせたテレビの生産は差し引きで1.5台増えることになる(表3第3行)。米については、自国が減らした分を外国がつくるだけなので、両国合わせた生産量は変わらない(表3第2行)。

	自国	外国	世界全体
米	-1	+1	0
テレビ	+2	-0.5	+1.5

表 3: 外国が米生産を肩代わりすることの効果

結果として、米の生産量を減らすことなく、テレビの生産量を増やすことに成功している。したがって、米は自国の代わりに外国が生産したほうが、両国を併せた世界全体の観点からは効率が良いということになる。

テレビ生産についてはどうだろうか。自国がテレビを1単位増産するには、2人の労働者を水田からテレビ工場に移す必要がある。これによって、米の生産量は0.5単位減少してしまう。一方、外国がテレビを1台増産するには、水田から10人の労働者を移動させる必要があり、したがって米の生産量は2単位減少してしまう。すなわち、同じ1台のテレビをつくるのに、外国は米を2単位犠牲にするのに対して、自国は0.5単位の犠牲で済むのである。そうであれば、外国のつくる1台のテレビを自国が代わりにつくってやれば、同じテレビがより少ない米の犠牲で生産できることになる。すなわち、両国を合わせたテレビの生産を不変に保ちつつ、米の生産量を増やすことができるのである。したがって、テレビは外国の代わりに自国が生産したほうが、世界全体の観点からは効率が良いということになる。

	自国	外国	世界全体
米	-0.5	+2	+1.5
テレビ	+1	-1	0

表 4: 自国がテレビ生産を肩代わりすることの効果

以上のように、どうやら自国はテレビの生産が得意で、外国は米の生産が得意であると言えそうである。そこで、自国がテレビの生産に、外国が米の生産に専念した場合、米とテレビの世界全体の生産量がどうなるかを見てみよう。表5のように、自国は米の生産を停止してテレビの生産だけに専念し、外国はテレビ生産を完全に止めて米だけに専念すると、両国を合わせた世界全体としては、米が400単位、テレビが400台生産できることになる。この状態を貿易前の状態(表2)と比較すると、世界全体では、米の生産は100単位、テレビの生産は100台増えていることがわかる。全体でみて両財の生産量が増えているのだから、貿易によってうまく両国で分け合えば、両国ともに貿易前より多くの米とテレビを入手できるはずである。

たとえば、外国はつくった400単位の米のうち150単位を自国に輸出し、自国はつくった400台のテレビのうち150台を外国に輸出するとしよう。すると、最終的に両国が入手できる(=消費できる)両財の量は表6のようになる。両国ともに両財の消費量を増やしていることは、表2と比較して容易に確認できる。

生産	自国	外国	世界全体
米	0	400	400
テレビ	400	0	400

表 5: 得意分野に専念することの効果 (1)

	自国	外国
米	150	250
テレビ	250	150

表 6: 得意分野に専念することの効果 (2)

このように、自国と外国はそれぞれ相手より少ない犠牲でつくることができる財の生産に専念することで、労働者数や技術が変わらずとも、世界全体としてはより多くの財を生産できるようになる（＝生産がより効率的に行われるようになる）。そして、お互いが自国でつくる財を交換することで、いずれの国も、全てを自分でつくっていた場合より多くの財を消費することができるのである（＝全ての国の人々がよりよくなる）。重要なことは、このようなことが可能となるのは、それぞれが得意分野に専念する（分業する）ことで生産効率が改善されるためであるということである。そして、分業が可能となるのは、貿易が「全ての財を自国でつくらなければならない」という制約から解放してくれるためなのである。